

## 虹

## 自然からのご褒美だ

## 168 デザイナー 木地師になる



自分で手掛けた挽物を手にする高島さん

古い格子窓の日差しを木肌がそっとはね返す。丸みを帯びた木の皿はつつましく美しいし、手になじむ。高島悠子さん(47)は1年間の修行成果の作品をいとおしくなされる。ベテランの職人は「これだけのものを1年で作れるのは筋がいい」と褒めてくれた。

高島さんは昨年、庄川地域で150年以上の歴史を誇る伝統工芸、庄川挽物木地の世界に飛び込んだ。挽物は丸く、塗装していない木製の器のこと。それを作る職人は木地師と呼ばれる。

庄川の木地師としては女性初。さらに10年ぶりの新人として注目される。受賞歴豊富なグラフィックデザイナーでもあるからか、発想は柔軟だ。「挽物は食器やお盆が中心だけど、家具や照明にも使えと思う」

挽物を一生の仕事にしようと腹を決めた。作業場用に自宅隣の空き家を買った。4月から研修施設でさらに学ぶ。卒業するのは51歳だ。



野球少女だった。巨人などで活躍した桑田真澄さんに憧れた。中学校のソフトボール部ではショートを担ったが、投げ方は桑田さんを参考にした。将来は日体大に進み、プロ選手になると夢見ていた。

女子プロ野球は存在しない。高校入学後によく知った。さらに高校にはソフトボール部すらなかった。かなうはずがなかった夢を諦め、仕方なく美術部に入った。

野球の次に興味を持ったのが広告だった。「バザールでござーる」というせりふをリズムカルに繰り返すパソコンのCMが気になった。広告クリエイターになる道の一つは美大進学だ。目標にした東京の美大の合格は得られず、金沢の専門学校に入った。専門学校は世界的に有名なニューヨークの美大と提携していた。高島さんはその仕組みを利用し、大学に編入した。

ニューヨーク生活はきついが、面白かった。同級生は女性でも坊主頭だし、顔中がピアスだらけだった。講師役のデザイナーは一流で、学生を甘やかさなかった。大量の課題をこなすのに明け方までかかった。

卒業後も現地で働いた。履歴書を100通送り、やっと採用された。オフィスでは、さまざまな国籍のデザイナーが勤めていた。「英語は私が一番下手。でも、作品では負けていなかった」。若さのおかげか、才能のなせるわざか。たくましく異国で生きぬいた。

就労ビザの2年の期限が切れようとしていた。会社にあった日本の専門誌を眺めていると、アメリカとは異なるとがった表現があふれ始めていた。この渦の中に入ってみたいと感じた。

帰国を決めた。20歳からアメリカにいたので、日本の事情には明るくない。専門誌のクレジットを見て知った超大手の広告代理店や制作会社に応募してみたが、さすがに難関だった。結局ハローワークで募集していたデザイン事務所に採用された。

何はともあれ、デザインは楽しい。アイデアが形になるのは快感だった。幸い、高島さんは広告賞を取るなど、すぐに認められた。大きな仕事も回ってきた。

仕事は順調でも、風通しのいいアメリカとは違った。ハラスメントと受け取れるよ

くれたのは、生まれたばかりのめいっ子だった。出産祝いに、その名前をオリジナルのフォントでデザインした。数カ月ぶりに作る楽しさを覚えた。額装して一家にプレゼントすると喜んでくれた。

歌人である裕さん(55)と結婚した。知人の紹介で知り合った。書かれたものに触れ、自分だけの表現ができることに惹かれた。

庄川地域にある夫の生家に引っ越した。個人的なつながりの中でパッケージやポスターのデザインの仕事を再開した。夫の歌集も装丁した。1人娘の琳ちゃんが生まれた。殺伐とした記憶を少しずつ遠くに追いやった。

会社を離れても才能を認めてくれる人はいた。県総合デザインセンター所長の桐山登士樹さん(70)もその1人。2016年のミラ



「清明」 広田 郁世

うな発言や、嫌がらせとしか思えない行為があった。身に覚えのない噂も聞こえてきた。負けん気が強すぎたのもよくなかったのかもしれない。「頑張れば見返せる」と信じていたが、心に重いものが積み重なっただけだった。今思えば転職すればよかったが、考える余裕すら失っていた。

深夜まで叱責された翌日、事務所にいるのも嫌になった。荷物も持たずに飛び出した。徒歩で家に向かう途中、川に飛び込もうと思った。飼い猫の顔と毛並みが頭に浮かんだ。抱きたくて踏みとどまった。

心身が弱り、ペンすら握れなくなっていた。遠方に住んでいた兄が退職届を代筆した。就職して10年が過ぎようとしていた。



魚津の実家に戻った。しばらく出掛ける気にもなれなかった。立ち直るきっかけを

ノ・トリエンナーレで県の展示室の会場構成を担当した際、高島さんを起用した。

高島さんは展示を象徴する立山連峰を壁一面に描いた。水晶の原石のように鋭く上がった峰々が空を突き刺す。それを背に富山の工芸品が並んだ。桐山さんは「誰も想像しない立山。度肝を抜かれた。富山の精神性や文化が凝縮されていた。次、に向かうというメッセージがあった」と振り返る。



地味でも暮らしに密接なものに関心が強くなった。デザインの世界は華やかでやりがいがある。しかし、移り気だ。美術展のポスターを作っても、会期が終われば捨てられる。ずっとそばにあるものを作りたい。

本棚にあった分厚い庄川町史の本を開いてみた。養蚕や和紙作りなど庄川にあった伝統的な産業は時代の濁流の中でほとんど

消えた。それでも残ったのが、庄川挽物木地だった。挽物は庄川の暮らしに溶け込む。どの家にもお盆が一つや二つはある。

伝統工芸士の工場を見学した。ろくろを回し、あつという間にかんなで木を削っていた。日の光を吸い込んだおがくずが舞う。作業する手つきが美しかった。聞けば庄川の職人は10人程度で、高齢化が進んでいるという。それなら自分がやらない手はない。

弟子入りを申し込むと、女性の前例はないと断られた。納得がいかず、今度は詳しい履歴書も添えて思いを伝えた。経歴も考慮してもらえたのか、認められた。夫の裕さんからは「あんたは言い出したら聞かぬからね」と笑われた。

没頭した。自分の手で挽いて生まれる木目は格別だ。デザインしようと思ってもできない天然の模様だ。木の種類によって手触りも違う。「自然からのご褒美だ」と思った。男性より力が劣る分、道具を大切にしたい。かなは毎日時間をかけて研いだ。切れ味がよければ余分な力はいらぬ。指導した島田昭さん(72)は「彼女は挑戦を怖がらないし、一生懸命。彼女の背中に憧れる人が出てくる。そんな可能性が見える」と話す。

この4月、石川県の「山中」に行く。山中漆器産業技術センターに入る。山中は挽物木地の日本一の産地。センターは挽物や漆器を専門的に学べる国内唯一の教育機関だ。庄川では得られない技術や知識を吸収できる。庄川の高齢化を見越せば、若い職人の横のつながりも役に立たないわけがない。

「基礎」と「専門」の二つのコースで学ぶには、4年間を要する。当面、加賀市のアパートで1人暮らしする。家には土日しか戻れない。6歳の娘が寂しく思うのは目に見えている。それでも、高島さんの挑戦を理解し、応援してくれている。「頑張るすぎないように頑張られ」と言ってくれた。硬質な気質をぼんやりと分かってくれている。

春。高島さんは入学式を迎える。娘も新1年生になる。不安はある。ワクワクもする。デザインのため、国境をまたいだ時と似た胸の高鳴りが聞こえる。次は県境を越える。

高島さんが庄川挽物木地の伝統工芸士として目標にするのは、小西弘洋さんです。1933年生まれで現役最年長。今も毎日ろくろに向かって、制作しているそうです。「私はまだ未熟なので何から尋ねればいいのかも分からない」と高島さん。山中で学ぶ技術、グラフィックデザイナーの感性を組み合わせ、一歩でも近づこうとしています。



## 「虹」第8巻 販売中

最新刊の第8巻「虹 誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141~160回目までの20話を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時~午後5時)。

心があたまのエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50

北日本新聞社西部本社「虹」係

FAX 0766-25-7773

mail niji@kitanippon.jp

次回掲載は5月1日(月)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに



企画・制作/北日本新聞社  
メディアビジネス局